

Thomas Dekker in 1611: *The Roaring Girl*における時代性と演劇的意識

佐 野 隆 弥

1. Dekkerと演劇的主体性

一般的に、ある特定の劇作家の時代性を検証する際、同時代の言説と相互に交渉を行うサブスタンシャルな主体を措定しておく必要がある。しかし、伝記的データや歴史的事実の記録が乏しいDekkerの場合、その主体そのものが、Philip Hensloweの日誌を始めとする同時代の演劇資料や、Dekker自身の戯曲や散文から抽出された事象から構成されていて、言うなればDekkerの主体とは、同時代の演劇的ネットワーク空間の中で絡め取られ、演劇的リアリティの中で構築され、存在するものとなっている点に特徴がある。

本論では、そのような前提に立脚した上で、演劇的存在であるDekkerのキャリアにおける転換点もしくは結節点であると著者が考える1611年の主要作である*The Roaring Girl*に注目する。その上で同戯曲を軸に、作品中で言及される戯曲群や演劇的事象とのネットワークを解析することで、Dekkerの持つ時代性——1611年の春というピンポイントの時点におけるDekkerの意識——の一面を記述することを試みる。

その理由は、*The Roaring Girl*という戯曲が、同時代のロンドンを喚起する市民劇的なフレームワークを使用する一方で、同時期に舞台にかけられた複数の戯曲に言及することを通して、劇作家は戯曲のクラスターの相互参照による意味空間を生成しようとしていると考えられるからである。また、そこにDekkerという主体の発信する、1つの時代性が存在すると考えられるからでもある。

2. 1611年のDekker——戯曲制作の転換点

上述したように、著者はDekkerの演劇的主体性という概念を提案し、その前提を受けて*The Roaring Girl*が創作された1611年が、Dekkerのキャリアに

おける重要な転換点もしくは結節点として考えることができるのではないかと主張した。次に、その点について敷衍しておこう。先ず、論末に付した作品年表を参照してもらいたい。¹ このリストを検証すれば、Dekkerのキャリアが大体3つのステージで構成されていることが判明し、そのうち第1ステージから第2ステージへの移行は、時代区分で言えば王朝交替とおおむね対応していると考えてよい。

第1ステージに当たる1598-1602年はElizabeth Iの治世下であるが、ジャンル面では市民劇からロマンスもの、歴史ものから諷刺劇にいたるまで、また創作形態も共作を主体に単独作も数編手掛けながら、(特にこのステージの前半においては) Hensloweの下で非常に活発な活動を展開していたことが理解できる(仮にDekkerの創作数を60数編と見積もった場合、このステージだけで60%以上の制作数となる)。おそらくDekkerは、この時期、主に受注生産体制的な創作状況にあり、興行需要に応答できる技術の向上を図っていたものと考えられる。

しかし、James Iが即位する1603年あたりから、従来の劇作に加えて、Dekkerはパンフレット等散文作品と、新国王を迎えての戴冠余興など新機軸を打ち出しているが、両者に共通するのはトピカルティへの関心であり、そのヴェクトルは*Sir Thomas Wyatt* や *The Whore of Babylon* などの戯曲における宗教政策へのコミットメントにも顕著に露見している。

ところが、ここまで多作を誇ってきたDekkerであったが、この第2ステージでは奇妙なことに、1606年の*The Whore of Babylon*を最後に約5年間劇作から離れ、再び舞台に戯曲を提供するようになるのが、本論で注目する1611年なのである。しかも、その直後の1612年からは7-8年もの長期間監獄に入獄している。1611年という年は、Dekkerの戯曲制作という観点から考えた場合、いわば前後を5年と7-8年間のブランクに挟まれた特異な時期であり、この特異点で書かれた*The Roaring Girl*は、(出獄後の第3ステージの全作品との比較も含めて) 質的なアспектから見ても、第2ステージは言うまでもなくDekkerの全キャリアを通じて、最も重要な作品の1つであることは自明であると思われる。

Dekkerの基本的創作形態が(数量面から見ても) コラボレーションであると措定した場合、*The Roaring Girl*においても、Dekkerの演劇的主体は共作者Thomas Middletonと干渉しつつ、本劇は戯曲内外における演劇的事象との参照ネットワークを通じて、ある特定の意味の磁場を生成していると考えられる

が、この点については後述する。

3. Dekkerにおけるコラボレーションの効用

では次に、Dekkerのコラボレーションにまつわる2つの事例を分析することで、コラボレーションという作業形態や、(その作業に当たる) Dekkerを取り巻く演劇的環境とのインターフェイスが、Dekkerの(同)時代性を確認する上でいかに重要なファクターとなるかを確認しておこう。

先ず1例目として、Dekkerの最初期の演劇的コミットメントと考えられる *Sir Thomas More* を取り上げる。本劇は、Anthony Mundayのオリジナルに対して、5人の改訂者の手が増えられたと考えられていて、この中でHand Eと呼ばれる改訂者がDekkerであるとされている。

現存原稿(改訂原稿)の状態

Act	Scene	原稿の状態	備 考
I	i	Mundayのfair copy	冒頭余白にTilneyの指示<1>
	ii	Mundayのfair copy	
	iii	Mundayのfair copy	Tilneyの指示<2><3><4>
II	i	改訂IIの最初の部分 (Hand B)	* Mundayのfair copyも現存する。 * 削除のマークはあるがTilneyのものかどうかは不明。
	(オリジナルの段階では、Dekkerによる“prentice scene”がここに存在したようだが、冒頭の断片のみ現存。削除のマークあり。)		
	ii	改訂IIの中間部分 (Hand C)	* オリジナルは存在しない。 * 一旦廃棄したオリジナルの場面に大幅な変更を加えて復活させたもの。
	iii	* 前半部150行は改訂IIの最終部分 (Hand D) * 後半部約90行はMundayのfair copy	前半部に対応するオリジナルは存在しない。
	iv	Mundayのfair copy	Tilneyの指示<5>
III	i	* 冒頭の約20行は改訂III (Hand C) * 続く約210行は改訂IVの前半部 (Hand C) * 最後の約30行は改訂IVの後半部 (Hand E)	* 改訂IIIは前場との連結性のため付加。 * 改訂IVはオリジナルの二つの場면을有機的に統一したもの。二つの断片が現存。
	ii	* 冒頭の約20行は改訂V (Hand C) * 続く約280行はMundayのfair copy * 最後の約50行は改訂VI (Hand B)	* 改訂Vは前後の連結性のため付加。 * 改訂VIは次場との連続性のため付加。
IV	i	Mundayのfair copy	Tilneyの指示<6>
	ii	Mundayのfair copy	Tilneyの指示<7>
	iii	Mundayのfair copy	
	iv	Mundayのfair copy (ただし、中間部約45行に作者側の削除マーク。その代替として改訂I (Hand A).)	国王への批判とも取れる台詞が含まれているので削除を試みたものか、オリジナルを用いるか改訂を使用するかは版によって異なる。
V	i	Mundayのfair copy	
	ii	Mundayのfair copy	
	iii	Mundayのfair copy	
	iv	Mundayのfair copy	

(Act・Sceneの表示は、The Revels Plays (1990) による。)

現存原稿の3幕1場に相当する箇所（改訂ⅢおよびⅣ）のうち、改訂Ⅳ（全体で約240行）の最終約30行をHand Eが担当している。改訂Ⅳを含む改訂Ⅲ-Ⅵは、断続的なエピソードを有機的に統一したり、場面間の連続性を滑らかなものにするための、劇的効果の見地からなされたものだが、（おそらくは）駆け出しのDekkerも改訂作業の一員として投入されたのであろう。ここで注目すべきことは、改訂Ⅳの大部分を受け持ったのが本劇の台本保管者（bookkeeper）であるHand Cであり、改訂を統括していたであろうこのHand Cから、Dekkerは制作現場の各種ノウハウを学習していたと思われる。

しかし、*Sir Thomas More* におけるDekkerの役割は、このような補助的作業にとどまる訳ではない。現存原稿の2幕1場と2場の間には、冒頭の断片のみが残存し、削除のマークが付されているが、オリジナルの段階では徒弟階級の暴動を描写した“prentice scene”がここには存在したようであり、これもDekkerの手になるものと考えられている。（検閲のためその大半が削除された）外国人排斥のための市民の武装蜂起と、この徒弟暴動の場面とが、オリジナルの*Sir Thomas More* における前半部のハイライトであることを考慮すれば、Dekkerは重要な意味作用を担う部分でも、コアの場面を受け持つ劇作家との協働を通して、様々な演劇的意識や感覚・気づきを蓄積したと考えられる。²

もう1つの事例として、*Satiromastix* を取り上げてみよう。Dekker自身が“Poetomachia”と名付けた演劇的事象である「詩人戦争」の一環を構成する本劇は、John MarstonとBen Jonsonとの間で交わされた、創作理念をめぐる個人間の諷刺合戦とは本来は別に、Jonsonの振る舞いに否定的な感情を抱いていた宮内大臣一座とセント・ポール少年劇団が共同でDekkerに制作を依頼して作劇されたものであった。そしてその情報を耳にしたJonsonは先制攻撃として*Poetaster*を作劇した訳だが、その中でDekker非難の根拠としたものの1つに、Dekkerが誰とでも手を組むという項目が存在する（“one Demetrius, a dresser / of plays about the town here” (III. iv. 321-22)).³ このことは、同時代の同業者がDekkerという演劇的存在の本質がコラボレーションであることを指摘した証言として、大いに興味をそそられる。またそれと共に重要なのが、Dekkerがこの“Poetomachia”をどう見ていたかということであろう。と言うのも、Jonsonへの諷刺として放たれたはずのこの*Satiromastix* 自体、「諷刺家への鞭」という看板にもかかわらず、実態は喜劇的・ロマンス劇風の結構を有しているからであり、その上Dekkerは、本劇のエピローグで以下のように述べ、

Are you aduiz'd what you doe when you hisse? you blowe away *Horaces* [=Jonson's] reuenge: but if you set your hands and Seales to this, *Horace* will write against it, and you may haue more sport: he shall not loose his labour, he shall not turne his blanke verses into wast paper: No, Poetasters will not laugh at him, but will vntrusse him agen, and agen, and agen.
(*Satiromastix*, Epilogus, 19-24)⁴

Jonson の性格を見越した上での第2弾の挑発を構想し、そのことによって“Poetomachia”を長引かせ、観客の関心を独占することによる、興行成績の向上を計画するという、強かな手練れの一面を見せているからでもある。Dekker という劇作家が、自己の演劇的存在を演劇興行にまつわる諸力学の平衡点に定位しながら、それを客観視する姿勢が窺える事例と言えよう。⁵

4. 自作をリサイクルする—*The Roaring Girl*における演劇的意識

5年間ほどの散文時代を経て、戯曲制作の現場に立ち戻ったDekkerの意識に発現したアイデアは、おそらく彼自身の本領とも言うべき「ロンドンもの」の再利用であったと考えられる。そのことは、この時期に創作した各種パンフレット——取り分け、*The Bellman of London*や*Lanthorn and Candlelight*——で使用した“canting language”（仲間内の隠語）を、*The Roaring Girl*の第5幕におけるMollの見せ場で活用していることから明らかである。DekkerがMiddletonと再び組むようになった経緯は不明だが、やはりロンドンを舞台にトピカルな諷刺を売りにしていたMiddletonとのコラボレーションであってみればなおさら、シティ喜劇選択の可能性は高くなる。そして*The Roaring Girl*創作初演の時期にロンドンの話題を独占していたであろうMary Frith (1584?-1659)をコアとする戯曲が構想されたとしても、何ら不自然ではない(Dekkerは、*The Roaring Girl*と同年の1611年に制作した*If It Be Not Good, the Devil Is in It*においても、Moll Cutpurseに言及している)。

ところで、この“roaring girl”というフレーズ自体は、OEDによれば本劇のタイトルが初例とされていて、真新しい用語のようである。しかし、*The Roaring Girl*のMollの機能を検証するに当たって、かりに既存の価値体系や言説に挑戦する者としての、文化人類学的トリックスターという補助線を引くならば、1611年のDekkerたちにとって、やはり再利用できる演劇的資源が、既

発表の、つまり過去の自作の中に存在していたと言うことも可能である。それが *Northward Ho* の娼婦 Doll であり、Moll と Doll とでは（取り分けジェンダー的な側面で）社会的コミットメントに違いが見られるが、⁶ イントリグ（不義密通とそれにまつわる策謀）を骨格とするアクションにおける狂言回し、という機能には共通のファクターを確認することができる。

Northward Ho は、よく知られているように、Dekker が駆け出しの John Webster と組んで制作した *Westward Ho* の成功に乗じて、ライヴァル少年劇団の Jonson, Marston, George Chapman が作劇した *Eastward Ho* へのカウンターとして創作された戯曲だが、この3つの「方向もの」が共通するフレームワークを採用していることは重要である。そしてそれが、ロンドン在住の市民商人階層の妻たちと、彼女たちを拐かす gallants,⁷ それを阻止せんと立ち回る夫たちが生成する関係性であり、「方向もの」3劇が提供する演劇の魅力とは、取りも直さず、この3者間での駆け引きや出し抜き——情報の制御と認識の操作を通した優位の確保——であったはずなのである。

「方向もの」から6-7年、1611年の転換点にいたDekkerは、Mary Frithというホットなトピカリティの領有が可能な状況下にいた訳だが、Dekkerたちがなすべき仕事は、いかにそのトピカリティを劇のアクションに絡めるか、つまりプロットもしくはプロット間の関係性の構築であったであろう。結果論から言えば、彼等が行った選択は、相続財産移譲をめぐる親子間の世代間闘争という伝統的主題と、gallants—商人の妻—その夫3者間での cuckoldry という、性的資源をめぐる、17世紀初頭に舞台で取り分け流通していた所有権争いであった。そして後者の事象の重要な要素である「密会の場所（トポス・方向性）」と“histrionics”（つまり、不義密通を他者に対して、見え隠れさせることで、意味を生成するという演技性）は、以下の引用にあるように、*The Roaring Girl* 4幕2場でリサイクルされ、再現されることになる——言うまでもなく、「方向もの」トリオとの意味作用のネットワークを期待して。

MASTER OPENWORK Yes, wife, strike sail, for storms are in thine eyes.
MISTRESS OPENWORK They're here, sir, in my brows, if any rise.
MASTER OPENWORK Ha, brows? — What says she, friend? Pray tell me
 why Your two flags were advanced: the comedy?
 Come, what's the comedy?

MISTRESS GALLIPOT

Westward Ho.

MASTER OPENWORK

How?

MISTRESS OPENWORK 'Tis *Westward Ho*, she says.

(*The Roaring Girl*, 4. 2. 133-38)⁸

しかし、意味作用のネットワークを意図しつつも、すべてのリンクをここに持ち込むような、そうした安易なリサイクルをDekkerらは行った訳ではない点にも、十分注意しておきたい。彼等は、「方向もの」トリオが、少年劇団によってその本拠地で（すなわち、比較的上流階級の、厳しい道徳感を持つ観客を対象に）上演されたことを常に視野に入れていたはずなのである。次の引用を参照してもらいたい。

Some for the person will revile the scene,
And wonder that a creature of her being
Should be the subject of a poet, seeing
In the world's eye none weighs so light:

(*The Roaring Girl*, Epilogue, 18-21)

*The Roaring Girl*のエピローグで、おそらくMoll役の役者によって語られたであろうこの台詞は、Mary Frithを舞台にかけることに関するDekkerらによる不安の表明に他ならないが、と同時に裏を返せば、フォーチュン座という空間と観客層を想定した上での、上演可能性ならびに収益の期待という計算の表明でもある訳である。

では、最後に本論の要点をまとめておこう。この論考は、1611年の春、戯曲制作に再びチャレンジしたDekkerの演劇的意識、その時点におけるDekkerの意識内に発現した現象の調査の試みであり、中期の市民喜劇*The Roaring Girl*を軸に、作品中で言及される戯曲群とのネットワークの分析を経由した、同時代性の意味の探求であった。結論として、Dekkerらは、Moll Cutpurseというトピカルティを起点に、直近の過去の市民劇をリユースすることを通して、同時代への回路を開いた、とすることができる。

注

- * 本論は、平成29～令和2年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））「エリザベス朝王朝交替期における諷刺的文化環境の出現と演

劇興行へのインパクト」(課題番号 17K02490)の成果の一部である。

1. 本年表の作成に当たっては、岩手県立大学石橋敬太郎教授から各種の教示を得た。
2. *Sir Thomas More* に関するより詳細な分析は、佐野隆弥、『『サー・トマス・モア』と検閲』、太田一昭編『エリザベス朝演劇と検閲』(東京：英宝社、1996年)、61-88頁参照。
3. *Poetaster* からの引用は、Tom Cain, ed., *Poetaster* (Manchester: Manchester UP, 1995) に拠る。
4. *Satiromastix* からの引用は、Fredson Bowers, ed., *The Dramatic Works of Thomas Dekker*, vol. 1 (Cambridge: Cambridge UP, 1970) に拠る。
5. *Satiromastix* に関するより詳細な分析は、Takaya Sano, “Boy Companies in 1601: Thomas Dekker’s *Satiromastix* and their Fortunes,” *Studies in Language and Literature* 77 (2020): 1-14 参照。
6. Doll は最終的に結婚し、社会秩序の中に回収される。
7. 初期近代演劇に登場する “gallant” 的人物は多義的であるが、おおよそ以下の OED の定義の発展型と考えてよい。B. n. 1. a. A man of fashion and pleasure; a fine gentleman. あるいは、3. One who pays court to ladies, a ladies’ man. Now somewhat rare. Also, a lover; in a bad sense, a paramour.
8. *The Roaring Girl* からの引用は、Paul Mulholland, ed., *The Roaring Girl* (Manchester: Manchester UP, 1987) に拠る。

参考文献

- Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*. 4 vols. Oxford: Clarendon P, 1951.
- Champion, Larry S. *Thomas Dekker and the Traditions of English Drama*. New York: Peter Lang, 1985.
- Comensoli, Viviana. “Play-making, Domestic Conduct, and the Multiple Plot in *The Roaring Girl*.” *SEL* 27.2 (1987): 249-66.
- Dekker, Thomas. *The Dramatic Works of Thomas Dekker*. 4 vols. Ed. Fredson Bowers. Cambridge: Cambridge UP, 1964-70.
- Dekker, Thomas and Thomas Middleton. *The Roaring Girl*. Ed. Elizabeth Cook. London: Bloomsbury, 1997.
- Gair, Reavley. *The Children of Paul’s: The Story of a Theatre Company, 1553-1608*. Cambridge: Cambridge UP, 1982.
- Gasper, Julia. *The Dragon and the Dove: The Plays of Thomas Dekker*. Oxford: Clarendon P, 1990.
- Harbage, Alfred. *Annals of English Drama 975-1700*. Rev. S. Schoenbaum. London: Methuen, 1964.
- Howard, Jean E. “Crossdressing, the Theatre, and Gender Struggle in Early Modern England.” *Shakespeare Quarterly* 39.4 (1988): 418-40.
- . *The Stage and Social Struggle in Early Modern England*. New York: Routledge, 1994.
- Hoy, Cyrus. *Introductions, Notes, and Commentaries to Texts in ‘The Dramatic Works*

- of Thomas Dekker.' 4 vols. Ed. Fredson Bowers. Cambridge: Cambridge UP, 1979.
- Jonson, Ben. *Poetaster*. Ed. Tom Cain. Manchester: Manchester UP, 1995.
- Leggatt, Alexander. *Citizen Comedy in the Age of Shakespeare*. Toronto: U of Toronto P, 1973.
- McLuskie, Kathleen E. *Dekker and Heywood*. New York: St. Martin's P, 1994.
- McNeill, Fiona. "Gynocentric London Spaces: (Re)Locating Masterless Women in Early Stuart Drama." *Renaissance Drama* 28 (1997): 195-244.
- Middleton, Thomas and Thomas Dekker. *The Roaring Girl*. Ed. Andor Gomme. London: Ernest Benn, 1976.
- . *The Roaring Girl*. Ed. Paul Mulholland. Manchester: Manchester UP, 1987.
- . *The Roaring Girl*. Ed. Jennifer Panek. New York: W. W. Norton, 2011.
- Munday, Anthony and others. *Sir Thomas More*. Eds. Vittorio Gabrieli and Giorgio Melchiori. Manchester: Manchester UP, 1990.
- O'Callaghan, Michelle. *Thomas Middleton, Renaissance Dramatist*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2009.
- Sano, Takaya. "Boy Companies in 1601: Thomas Dekker's *Satiromastix* and their Fortunes." *Studies in Language and Literature* 77 (2020): 1-14.
- Shapiro, Michael. *Children of the Revels: The Boy Companies of Shakespeare's Time and Their Plays*. New York: Columbia UP, 1977.
- Stage, Kelly J. "The Roaring Girl's London Spaces." *SEL* 49.2 (2009): 417-36.
- Taylor, Miles. "'Teach Me This Pedlar's French': The Allure of Cant in *The Roaring Girl* and Dekker's Rogue Pamphlets." *Renaissance and Reformation* 29.4 (2005): 107-24.
- Ungerer, Gustav. "Mary Frith, Alias Moll Cutpurse, in Life and Literature." *Shakespeare Studies* 28 (2000): 42-84.
- West, William N. "Talking the Talk: Cant on the Jacobean Stage." *English Literary Renaissance* 33.2 (2003): 228-51.
- Wiggins, Martin and Catherine Richardson. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*. 8 vols. Oxford: Oxford UP, 2012-7.
- Woodbridge, Linda. *Women and the English Renaissance: Literature and the Nature of Womankind, 1540-1620*. Urbana: U of Illinois P, 1984.
- 佐野隆弥. 「『サー・トマス・モア』と検閲」. 太田一昭編『エリザベス朝演劇と検閲』(東京: 英宝社, 1996年). pp. 61-88.

Thomas Dekker (1572?-1632) 現存作品年表

(推定創作数 40 以上. 現存数 17, 単独作 5. 多めに数えれば共合作を含め 64 ほど. 1594-1604 の間, Henslowe のために 44 作. 下線はパンフレット作品)

- 1592 *Sir Thomas More* (with Munday, Chettle, Heywood & Shakespeare, 上演
-93 劇団不詳)
- 1598 (単独戯曲 2 作, 共作戯曲 10 or 11 作, すべて紛失)
(負債者監獄から出獄するために Henslowe から 40 シリング借金)
- 1599 *The Shoemaker's Holiday* (市民喜劇, 海軍大臣一座)
Old Fortunatus (道徳劇仕立ての荒唐無稽な幻想的喜劇, 海軍大臣一座)
Troilus and Cressida (with Chettle, プロットのみ, 海軍大臣一座)
Look About You (with Chettle, 海軍大臣一座)
The Weakest Goeth to the Wall (in part?, オックスフォード伯一座)
(それ以外に, 単独戯曲 1 作, 共作戯曲 4 作, すべて紛失)
- 1600 *Patient Grissil* (with Chettle & Haughton, 海軍大臣一座)
Lust's Dominion (with Day & Haughton, 海軍大臣一座)
(それ以外に, 単独戯曲 2 作, 共作戯曲 3 作, すべて紛失)
- 1601 *Satiromastix* (諷刺劇 & ロマンズ劇, 宮内大臣一座 & セント・ポール少年
劇団)
Blurt, Master Constable (Dekker?, セント・ポール少年劇団)
- 1602 *Sir Thomas Wyatt* (with Webster, Heywood & Chettle, ウスター伯一座)
(それ以外に, 単独戯曲 1 作, 共作戯曲 5 作, すべて紛失)
- 1603 *The Merry Devil of Edmonton* (宮内大臣一座)
The Bachelor's Banquet (Dekker 最初の散文)
The Wonderful Year 1603 (ペスト流行のセンセーショナルな記録)
- 1604 *The Magnificent Entertainment Given to King James* (戴冠余興, ロンドン
市)
The Arches of Triumph (with Harrison and Webster) (戴冠余興, ロンドン
市)
I The Honest Whore (with Middleton, ヘンリー王子一座)

- Westward Ho* (with Webster) (ロンドン喜劇, セント・ポール少年劇団)
The London Prodigal (Shakespeare, Dekker?, Drayton?, Marston?, 国王一座)
- 1605 *Northward Ho* (with Webster) (ロンドン喜劇, セント・ポール少年劇団)
(Chapman, Jonson & Marston, *Eastward Ho*は王妃祝典少年劇団)
II The Honest Whore (ヘンリー王子一座)
The Double PP (ローマ教会に対するイングランド教会の勝利のなかにエリザベス女王を賛美したもの)
News from Hell
- 1606 *The Whore of Babylon* (ヘンリー王子一座)
A Night's Conjuring (another version of *News from Hell*)
The Seven Deadly Sins of London (ロンドン下町の悪や欺瞞の記述)
- 1607 *Jests to Make You Happy*
- 1608 *The Dead Term*
The Bellman of London
Lanthorn and Candlelight
- 1609 *The Gull's Horn-Book* (有閑青年の生態諷刺)
The Raven's Almanac
Work for Armorers
The Four Birds of Noah's Ark (a collection of prayers)
- 1611 *The Roaring Girl* (with Middleton, ヘンリー王子一座)
If It Be Not Good, The Devil Is In It (アン王妃一座)
- 1612 *Troia-Nova Triumphans* (civic pageant, ロンドン市)
(1612(3)-19 まで負債者監獄に入獄)
- 1613 *A Strange Horse-Race*
- 1620 *The Virgin Martyr* (with Massinger, レッド・ブル一座)
(それ以外に, 共作戯曲 1 作, 紛失)
- 1621 *The Witch of Edmonton* (with Ford & W. Rowley, チャールズ王子一座)
Match Me in London (レッド・ブル一座)
- 1622 *The Noble Spanish Soldier* (上演劇団不詳)
The Wonder of a Kingdom (チャールズ王子一座)
- 1623 *The Welsh Ambassador* (with Ford?, レディ・エリザベス一座?)
(それ以外に, 共作戯曲 2 作, すべて紛失)

- 1624 *The Sun's Darling* (with Ford, masque, レディ・エリザベス一座)
(それ以外に、単独戯曲 1 作、共作戯曲 4 作、すべて紛失)
- 1628 *Britannia's Honour* (civic pageant, ロンドン市)
- 1629 *London's Tempe* (civic pageant, ロンドン市)
(それ以外に、単独戯曲 2 作、すべて紛失)
- 1631 (単独戯曲 1 作、紛失)
- 1632 *English Villanies*